# 自然を観察した人たち

市岡智寛が集めて整理した石の標本。播州（兵庫県）や野州（栃木県）など、信濃国以外の石も多数含まれている。（飯田市　北原斌夫蔵）

## ◆石の観察をした人たち

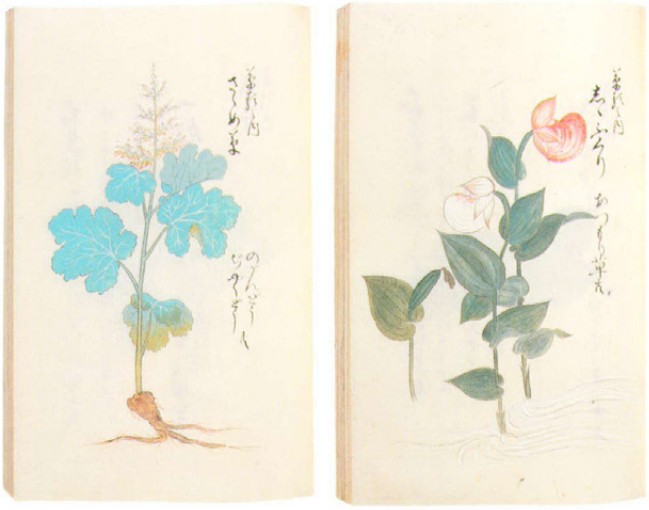
みなさんは押し花をつくったり、珍しい石に心ひかれたりしたことがあると思います。江戸時代にも植物や石の観察・採集に取り組んだ人がいました。

日本中の石を観察した人に近江国（滋賀県）の木内石亭がいます。彼の著書『雲根志』には「松毬化石」「星糞石」「木葉石」「苔ノ化石」など信濃国の珍しい石がたくさん登場します。科学的な研究は明治時代以後ですが、自然界の産物に興味をもって研究する人びとが現われたのが江戸時代でした。旗本の家来で飯田に住んだ市岡智寛も石に関心があり、鉱物や貝の標本を残しています。美しく整理され産地と名前が記録されているようすは現在の標本にも負けません。

## ◆植物採集のメッカだった信濃

当時病気を治すのには薬草が使われました。そのため野生の植物を観察する本草学という学問が発達しました。本草学は植物だけでなく、動物や鉱物など自然の産物全般を研究の対象にしていました。信濃国は山国で珍しい動植物や鉱物が多く、江戸中期から本草学

薬の原料として採集されたコマクサ



三村森軒の著した「木曽産物」。木曽の動植物が絵入りで紹介されている。（名古屋市博物館蔵）

三村森軒が木曽の草木をイロハ順に分類してまとめた「信州木曽山草木以呂波寄」（名古屋市東山植物園蔵）

者が盛んに訪れる場所でした。尾張国（愛知県）の本草学者三村森軒は一七四〇年（元文五）に木曽や伊那を訪れ、「木曽産物」などを残しました。同じ尾張の水谷豊文も一八一〇年（文化七）木曽を訪ね『木曽採薬記』を著しました。彼は御嶽山に登ってコマクサなどの高山植物も採っています。コマクサは麻酔のはたらきをするので胃腸薬の原料として採集されていました。水谷の弟子の伊藤圭介は、木曽の他に戸隠（戸隠村）へも薬草を求めて来訪しています。彼はその成果を『日本産物志信濃部』にまとめました。

信濃国でも市岡智寛が植物の観察や研究をおこない、日本で最初のキノコの図鑑といえる『信陽菌譜』などを著しています。市岡と同じ飯田出身の田中芳男も本草学に詳しく、幕府の役人として一八六七年（慶応三）のパリ万博に昆虫標本を作成して出品しました。田中は明治政府の高官としても活躍し、上野動物園や東京国立博物館・東京大学農学部などの設立に関係しました。

今でも木曽や伊那では薬草を使った薬が生産されています。信濃の自然を観察し生活に役立てようとした人びとの経験が生かされているのです。

（橋詰文彦）

# 絵を描く庶民たち

松代藩士恩田民正の長女ゆり（恩田緑陰）が描いた「松代十二箇月絵巻」のうち雛祭りと祇園祭の部分。
（真田宝物館蔵）

佐竹蓬平が1783年（天明３）に描いた柘榴小禽図
（飯田市美術博物館蔵）

## ◆画執心につき

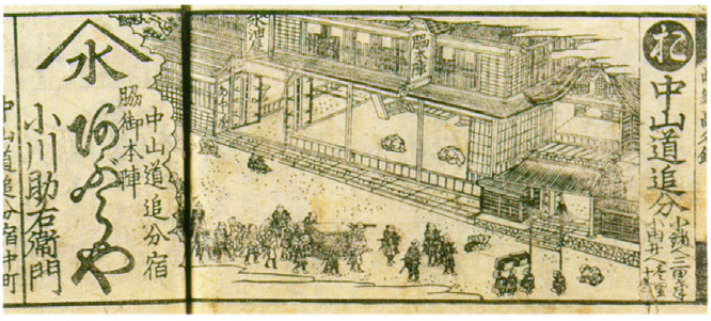
村絵図を作ったり、測量図を描いたりするために、村には絵師が必要でした。豪農や豪商たちは、自分の肖像画などもこれらの人に頼むようになりました。こうして、文化・文政期（一八〇四～三〇年）ごろから、庶民の中からも余技に絵を描きやがて専業画家になる人びとも多くあらわれました。

幕府領の佐久郡中桜井村（佐久市）の農民叔助は、一八五八年（安政五）、「私は画執心につき（画を描くことが大好きなので）京都の嵯峨御所へ絵画修業に出させてください」と願いを出しています。

## ◆佐竹蓬平と鈴木芙蓉

農民出身画家のなかで、早くから活躍したのが、伊那郡大瀬木村（飯田市）の庄屋の家に生まれた佐竹蓬平でした。江戸に出て絵を学んだ後、絵を描きながら京都や九州など各地をまわりました。一七八五年（天明五）に郷里に帰って画作につとめ、山水画や人物画に優れた作品を残しました。

大瀬木村の隣村の伊那郡北方村（飯田市）からは、




『諸国道中商人鑑』にみえる中山道追分宿脇本陣あぶらや。
（長野県立歴史館蔵）

近代洋画の草分け、川上冬崖の「ナポレオン」
（長野県信濃美術館蔵）

合葉文山の科学的な写生画『蝶譜』
（香川県　合葉由紀蔵）

蓬平とほぼ同時期に、江戸画壇で活躍した鈴木芙蓉という農民画家もでています。

## ◆女流画家たち

江戸で活躍した椿椿山という画家の信濃出身門人八人のなかに、追分宿（軽井沢町）脇本陣の小川助右衛門の妻がいました。この女性は松琴という画号をもっていました。また、松代藩士の娘恩田緑陰は「松代十二箇月絵巻」という幕末の松代の武家生活絵巻を残しています。

## ◆庶民画家たちの活躍

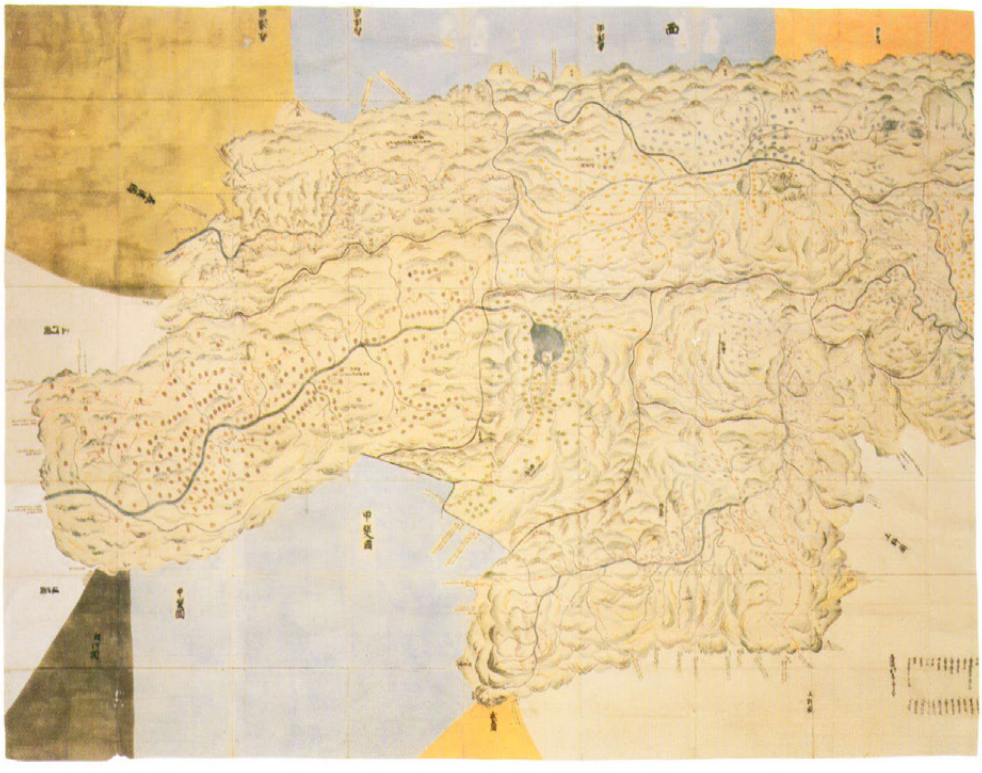
蝶や蛾の日本最初の本格的な収集家で、画家としても著名な合葉文山は上田の町人の子でした。文政年間（一八一八～三〇年）に絵画修業の旅に出て、九州で田野村竹田などに学び、讃岐（香川県）の金比羅宮のちかくで生涯を終えました。

松代藩領福島新田村（長野市）の農家に生まれた山岸斧松は、画才が認められ、幕府の蕃書調所の絵図調役となりました。後に彼は川上冬崖と名のり、幕末から明治にかけての日本近代洋画の先駆者となりました。このように、江戸時代後半から庶民出身の芸術家が多く生まれ、活躍をはじめました。

（青木歳幸）

# 信濃の国は十州に

## ―郷土研究のはじまり



元禄国絵図のもとになった正保国絵図（1647年・正保４）のうち中南信の領分図
（原図は上田市立博物館蔵）

### ◆信濃と元禄国絵図

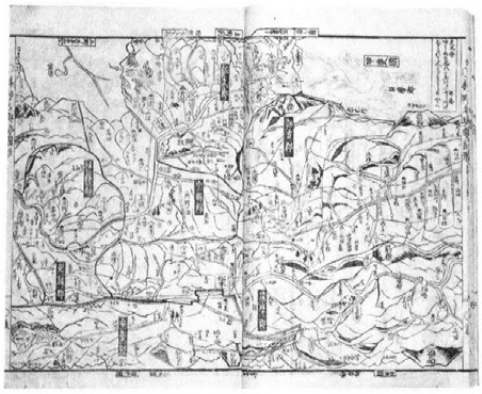
「信濃の国」の歌詞にある十州とは、越中（富山県）・越後（新潟県）・上野（群馬県）・武蔵（埼玉県）・甲斐（山梨県）・駿河（静岡県）・遠江（静岡県）・三河（愛知県）・美濃（岐阜県）・飛騨（岐阜県）でしたね。

信濃が一つの国にまとまって、これら十の州（国）と境を接するようになったのは、一七世紀後半に諸大名の移動が一段落してその所領が固まり、国境と領分境とが一致するようになってからなのです。

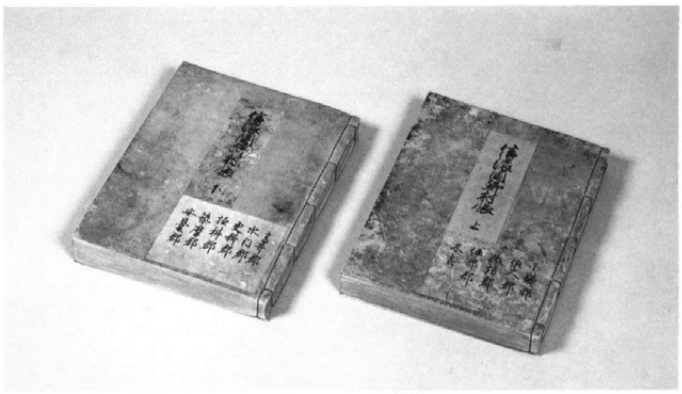
一六九七年（元禄一〇）に幕府は全国の国ごとに絵図（絵地図）の作成を命じました。信濃では松本藩や上田藩などがその作成を担当し、各領内の村むらや交通路、国境を記録して、五年後に幕府へ提出しました。

### ◆『信府統記』と『四隣譚薮』

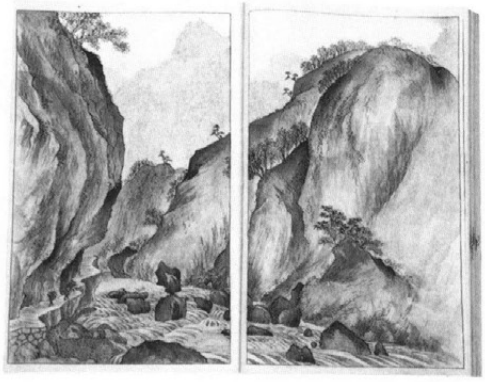
元禄国絵図作成に苦労した松本藩では、一七二四年（享保九）に、領内だけでなく信濃各領の地理や歴史をも記録した信濃一国の郷土史書『信府統記』三三巻を完成しました。



『信濃地名考』にみえる信濃一国図
（長野県立歴史館蔵）



信濃国の全村が書き上げられた『正保郷村帳』（上田市立博物館蔵）



『蕗原拾葉』（高遠町立歴史博物館蔵）

信濃一国の歴史をまとめた『信府統記』
（長野県立歴史館蔵）

学問が普及し、経済が発展して、各地への旅をするようになった有力農民や商人のなかから、身近な郷土の歴史や地誌への関心を高める者もでてきました。

佐久郡岩村田村（佐久市）の寺子屋師匠吉沢好謙は、岩村田を中心に周囲の城郭や社寺の歴史をまとめた『四隣譚藪』（一七三五年・享保二〇）や信濃一国の歴史書『信陽雑誌』（一七四四年・延享元）、信濃全域の地名の由来を記した『信濃地名考』（一七七三年・安永二）などを著しました。

好謙とほぼ同時代の佐久郡野沢村（佐久市）の瀬下敬忠も『千曲之真砂』（一七五三年・宝暦三）という国郡・名所地名・諸城の沿革などを記した信濃一国の歴史書を著しました。

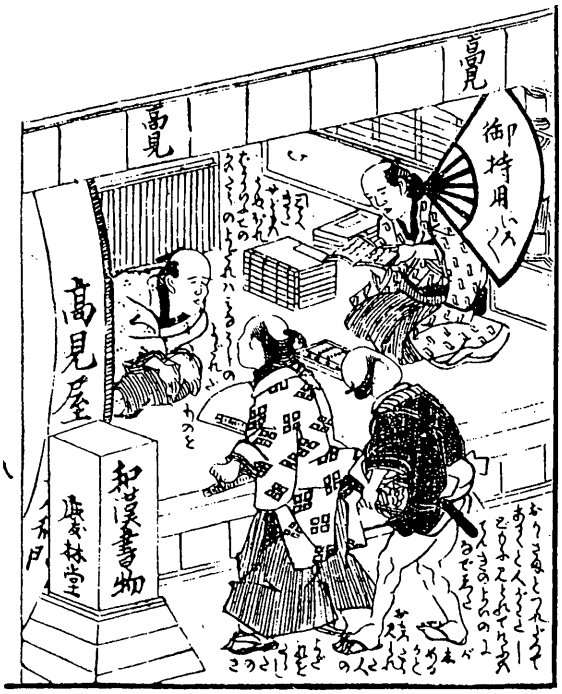
## ◆郷土史への関心の高まり

一七四一年（元文六）に、伊那郡片桐町（松川町）の寺子屋師匠宮崎言周が、伊那郡村むらの由来などを記録した『伊奈郡郷村鑑』という歴史書をまとめました。

高遠藩の儒者中村元恒とその子元起によって幕末期に編まれた郷土資料集『蕗原拾葉』は、正編五五四冊、一五〇巻、続編一一七冊三三八巻という大部なものとなりました。

（青木歳幸）

# 出版文化のひろがり




松本の書店高見屋の店先。慶林堂は、高見甚左衛門の狂歌名でもあった。（㈱郷土出版社『十返舎一九　信濃紀行集』より。原本は上越市　高橋孫左衛門蔵）

上田海野町の本屋上野屋三郎助。酣古堂という屋号で書物や錦絵販売のほか、貸本もしていた（「諸国道中商人鑑」　長野県立歴史館蔵）

## ◇江戸時代の出版文化

江戸時代の出版は木版印刷でした。京都・大坂・江戸など大都市には、早くから出版業者がおり、浮世草紙（小説）とか仏教書・俳書・旅行案内・地図などを印刷していました。

俳諧が庶民にも流行してくると、一枚刷りからはじまって、冊子を印刷する業者も信濃の町にあらわれ始めました。

## ◇信濃の本屋さん

明和期（一七六四～七二年）の松本町（松本市）の白木屋与兵衛が信濃で最初の出版業者です。ついで玉楮堂（地域不明）がでてきました。寛政期（一七八九～一八〇一年）には善光寺町（長野市）に百菜堂、上田町（上田市）に坂木屋市兵衛があらわれました。文政～天保期（一八一八～四四年）になると善光寺町に小枡屋喜太郎・石川藤八、稲荷山宿（更埴市）に橘葉堂、松本に高見屋・岩本平蔵、川中島（長野市）に松屋平助なども出版を始め、幕末には善光寺門前に蔦屋伴五郎、上田に上野屋三郎助・柏屋宗兵衛・福屋惣兵

追分宿丸屋与六発行の善光寺地震についての瓦版（個人蔵）

『古文孝経』という本の巻末に「善光寺横町書肆松木国平」の名がみえる。（長野県立歴史館蔵）

衛、松本に嶋屋与市、中野（中野市）に平野屋恒七、小諸（小諸市）に小山石蔵、追分宿（軽井沢町）に丸屋与六、須坂（須坂市）に佐渡屋兵右衛門、そのほか富田屋儀三郎・吉田屋勝蔵・住田奥右衛門・松木国平などがあり、俳書や道路案内図などを出版していました。

## ◆松本高見屋と追分丸屋

狂歌や俳諧をたしなんでいた松本の高見屋甚左衛門の店へは、旅する文化人もよく立ち寄りました。十返舎一九も一八一四年（文化一一）には一か月も滞在し、五年後にも再び訪れています。書店は地域の文化センターでもあり、さまざまな情報を発信しました。

追分宿の丸屋が発行した善光寺地震の瓦版が、江戸を経由して尾張名古屋でも頒布されていました。地方発の情報が都市に伝えられたのです。

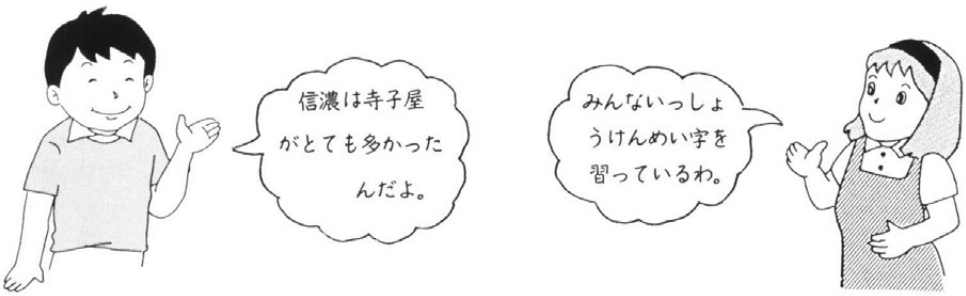
## ◆蔵書の家

本は高価でしたから、筆写や貸本もよくおこなわれました。座光寺村（飯田市）の北原家や志賀村（佐久市）の中沢家、井上村（須坂市）の堀内家などの蔵書は、飢饉の時は救荒書、祭りの時は芝居の本などが村人に貸し出されその教養を高めました。

（青木歳幸）

# 教育県の源流

信州根津（東部町祢津）にあった寺子屋の図。山越という先生に、６歳の貞彦、８歳の富彦、７歳の由松が字を習っている。（京都府　文適堂蔵）




## ◆なまけるなイロハニホヘト散る桜

これは、小林一茶の俳句です。手習いが大切だから農閑期の冬の間にイロハの勉強をしなさいと、いろりの灰の上に字を書いて教えている親の姿が浮かんでくるようですね。文化・文政期（一八〇四～三〇年）ごろからこうした教育熱心な親の姿がみえてきました。

庶民教育の中心は、寺子屋（手習所）でした。中世の寺院に勉強に通う者を寺子と呼んだところから、その教育の場を寺子屋とよびました。

寺子屋の数は一八世紀中ごろから増え、一九世紀前半に急増しました。農民の師匠も増えて、江戸時代を通じ六一六三人もの師匠が知られています。そのころから庶民にも読み書きと計算の能力が必要になってきたからです。

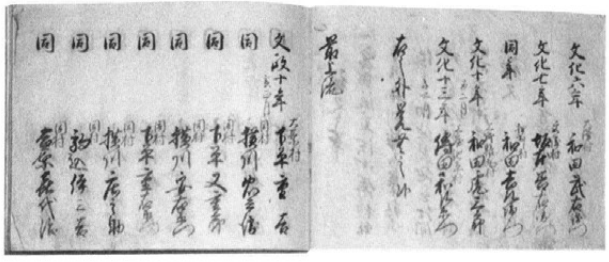
一八五八年（安政五）ごろ、更級郡森村（更埴市）の中条唯七郎が書いた『見聞集録』には、年季奉公の下女までが熱心に夜学をしていると書かれています。

## ◆寺子屋の授業と寺子

一般には六、七歳から農閑期に、実用的な読み書き

手習いや書のほか和算・謡の師匠寺島宗伴の算子塚（鬼無里村）

寺子屋教具や手本がのっている師匠と寺子の机
（辰野町　小澤和延蔵）



寺島宗伴の門人帳（鬼無里村歴史民俗資料館蔵）

算盤を習いました。教科書は『いろは歌』や手紙の書き方をまとめた『庭訓往来』、村の名前を記した『村名尽』などでした。

女子の就学率は農村部では低かったのですが、都市部では、商家の女子の教養が必要とされ、女子教育がさかんでした。伊那郡飯田町（飯田市）の宮下塾では、一〇四九人中三八〇人（三六パーセント）が女子でした。

## ◆村営寺子屋ができた

教育が必要になってくると、師匠がいない村では、村の費用で手習い師匠を呼ぶ例も出てきます。一八二三年（文政六）諏訪郡笹原新田村（茅野市）では、甲斐国（山梨県）巨摩郡から師匠をよんでいます。同じ諏訪郡の萩倉新田村（下諏訪町）では、一八五一年（嘉永四）に村の費用で師匠用の家を建てそこで手習いをするようにしました。いわば村立学校のはじまりです。

こうした教育熱心な風土が、一八七二年（明治五）の学制発布以後、村立小学校の設立へとつながっていったのです。

（青木歳幸）

# 芸道のひろがり

## ◆家元制度が発達した

よく茶道教室とか生け花教室の看板をみかけることがありますね。こうした稽古事は、江戸時代の後半の家元制度の発達とともに全国各地にひろがりました。

## ◆蹴鞠の流行

平安時代、貴族の遊技であった蹴鞠も、江戸時代には飛鳥井・難波両家を家元として、地方の武士や有力農民の間に流行しました。

佐久郡野沢村（佐久市）の有力農民瀬下敬忠は、俳諧だけでなく蹴鞠も大好きでした。宝暦から明和年間（一七五一～七二年）にかけて佐久地方に蹴鞠が大流行し、敬忠はこれらの大会にでかけ、武士や有力農民らと技を競い合いました。

そのころ松本には信濃一の蹴鞠名人扇屋伊右衛門がいました。出川村（松本市）の大庄屋中田源次郎、小県郡下塩尻村（上田市）の沓掛権右衛門や松代藩主真田幸貫らが飛鳥井家から蹴鞠免許状を得ています。

## ◆茶道・花道の達人

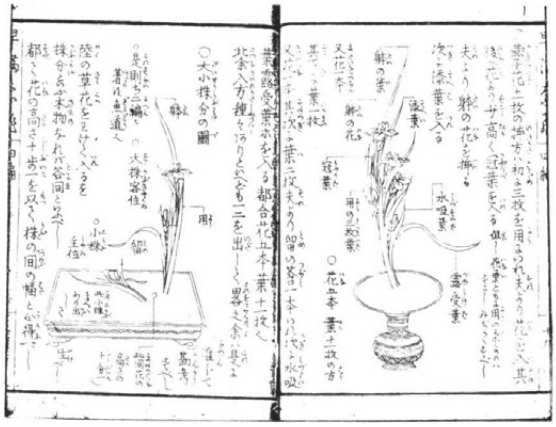
水内郡鬼無里村（鬼無里村）の寺子屋師匠寺島宗伴は、読書や和算のほか、茶道・謡曲・挿花（生け花）なども大人向けの教養として教えていました。

池坊という生け花の流派が今も続いています。更級郡塩崎村（長野市）の宮崎平右衛門は一七八六年（天明六）に池坊から生け花の免許状を与えられています。一八一五年（文化一二）だけで信濃国で七六人ほどが知られています。文化・文政期（一八〇四～三〇年）のころには、江戸から正風遠州流がはいってきました。佐久郡田野口村（臼田町）の葛峰斎一海は、一八四九年（嘉永二）までに一一七人の門人を指導しています。

## ◆謡曲のひろがり

北信地方の結婚式などで「高砂や」などと年輩の方がよく謡っています。これを謡曲といいますが、もともと真田家など武士の式楽であったものが、江戸後期に庶民にもうたわれ、さらに明治時代に一層ひろがったものです。このような貴族や上級武士の芸事が、武士らを交えて庶民の間に流行したことに、社会生活の進展をみることができます。

（青木歳幸）



花道の本（『花道早学び』 個人蔵）

花道・茶道などの達人　寺島宗伴
（鬼無里村　北澤昭一蔵）

# 参考文献


テーマ1

峯岸太郎「近世後期松本における大庄屋層の婚姻について―中田家婚礼祝儀帳の分析から―」(『信濃』四五―二　一九九三)

「きりもくさ」(『新編信濃史料叢書第一〇巻』　一九七四)

『十返舎一九　信濃紀行集』(郷土出版社　一九九五)

『松本城町跡　伊勢町―近世・町屋跡の発掘調査』(松本市教育委員会　一九九六)

『松本城三の丸跡―土居尻武家屋敷跡の発掘調査概報―』(松本市教育委員会　一九九三)

『長野県統計書』(明治一六～昭和四四年　長野県総務部情報統計課)

久下司『ものと人間の文化史　四　化粧』(法政大学出版局　一九七〇)

尾崎行也「安永～寛政期佐久郡農家の家具・農具類―『分散帳』考(1)―」(『信濃』四四―五　一九九二)

『松本の押絵雛』((財)日本民俗資料館・松本市立博物館　一九九〇)

信濃教育会編『一茶全集』(信濃毎日新聞社　一九七六～七九)

尾崎行也「孝子伝考―信濃国上田領について―」(『信濃』三七―一　一九八五)

高木侃「江戸の親子契約　老親扶養をめぐって」(『月刊百科』四〇六号　一九九六)

テーマ2

古川貞雄『村の遊び日』(平凡社　一九八九)

『長野県史通史編第六巻近世三』(長野県史刊行会　一九八九)

浅川清栄責任編集『図説高島城と諏訪の城』(郷土出版社　一九九五)

今井広亀『諏訪高島城』(諏訪市教育委員会　一九七〇)

渡辺尚志『江戸時代の村人たち』(山川出版社　一九九七)

近藤晴一「文政～弘化期の名古屋の災害情報―善光寺地震を中心として」(『信濃』四九―二　一九九七)

『上高井誌歴史編』(上高井教育会　一九六二)

『須坂市史』(須坂市史編纂委員会　一九八一)

テーマ3

『信州の街道』(郷土出版社　一九九一)

『歴史の道調査報告書XXIV―富倉道―』(長野県教育委員会　一九八八)

『歴史の道調査報告書V―大笹道―』(長野県教育委員会　一九八〇)

深井甚三『江戸の旅人たち』(吉川弘文館　一九九七)

信濃毎日新聞社戸隠総合調査実行委員会編『戸隠―総合学術調査報告』(信濃毎日新聞社　一九七一)

穂苅三寿雄・穂苅貞雄『槍ヶ岳開山播隆』(増訂版　大修館書店　一九九七)

『信州の紙幣』((財)八十二文化財団　一九九五)

伊坪達郎「飯田藩の藩札発行」(『信濃』四三―九　一九九一)

『諸国道中商人鑑』(郷土出版社　一九八九)

生駒勘七・神村透・小松芳郎『図説・木曽の歴史』(郷土出版社　一九八二)

『南木曽の歴史　歴史資料館展示図録』(南木曽町博物館　一九九六)

テーマ4

小林計一郎『小林一茶』(吉川弘文館　一九六一)

斎藤忠『木内石亭』(吉川弘文館　一九六二)

朝倉治彦・大和博幸編『近世地方出版の研究』(東京堂出版　一九九三)

## 協力者のみなさん（五十音順、敬称略）

合葉由紀
青木源
飯田市美術博物館
伊藤益郎
上田市立博物館
大森久芳
尾崎行也
小澤和延
小野澤貞晴
小原稔
観音寺
木内寛
北澤昭一
北原斌夫
鬼無里村歴史民俗資料館
木下守
（株）郷土出版社
国立公文書館
小林改一郎
小諸市徴古館
坂井銘醸株式会社
坂本康之
真田宝物館
重田祐一
清水憲之助
須坂市立博物館
高遠町立歴史博物館
高橋孫左衛門
武石村ともしび博物館
竹内靖長
竹前勝市
田中本家博物館
天理大学附属天理図書館
中沢一朗
長野県信濃美術館
長野県総務部情報統計課
名古屋市博物館
名古屋市東山植物園
（財）日本民俗資料館
根羽村教育委員会
（財）八十二文化財団
藤牧弥之助
古川貞雄
文適堂
牧野一郎
松尾佑三
松本市教育委員会
吉澤健生

## あとがき

長野県立歴史館では、毎年一冊ずつ、テーマをきめてブックレットを発行しています。四冊目のこの本は、近世（江戸時代）の信濃の歴史について、小学生や中学生のみなさんにも興味をもって読んでもらえるように企画・編集したものです。

江戸時代の信濃の人びとも、よりよい暮らしを求めて生きていました。そのことが現代の生活と結びつけて理解できるように本書は執筆されています。

この本を参考にして、もっと深く歴史を勉強してみたいというみなさんは、ぜひ歴史館に来てください。歴史館では本書に載っている資料の展示や閲覧公開もしています。専門の職員がみなさんの質問にもお答えします。

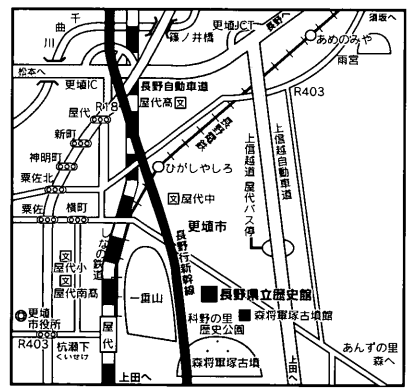
本書のために、貴重な写真や資料などをこころよくご提供くださった多くの方がたにお礼申しあげます。

一九九八年三月

長野県立歴史館


編集・執筆
青木歳幸
小野和英
杵渕健吉
久保田貞親
坂部詠章
舘林弘毅
橋詰文彦
丸山文雄

長野県立歴史館
信濃の風土と歴史④　近世の信濃
一九九八（平成一〇）年三月三一日発行
編集・発行　長野県立歴史館
〒三八七―〇〇〇七　長野県更埴市屋代清水二六〇―六
科野の里歴史公園内
電話　〇二六―二七四―二〇〇〇（代）
FAX　〇二六―二七四―三九九六
印刷　信毎書籍印刷株式会社




# 利用案内

**（開館時間）**

午前九時～午後五時

（入館は午後四時三〇分まで）

**（休館日）**

月曜日（祝日・振替休日にあたるときは火曜日）

祝日の翌日（日曜日にあたるときは開館）

十二月二八日～一月三日

**（常設展観覧料）**

| | 一般 | 高校・大学生 | 小・中学生 |
|---|---|---|---|
| 個人 | 三〇〇円／ | 一五〇円／ | 七〇円 |
| 団体 | 二〇〇円／ | 一〇〇円／ | 五〇円 |

（団体二〇名以上）

学校の教育活動として観覧する県内の小・中・高校生および障害者手帳をお持ちの方と介護者の方は減免になります。

**（交通案内）**

長野行新幹線上田駅で乗り換え、しなの鉄道屋代駅から徒歩二五分

長野電鉄河東線東屋代駅から徒歩二〇分

長野自動車道・上信越自動車道更埴ＩＣから車五分

高速道路バス停「上信越道　屋代」から徒歩三分

森将軍塚古墳と長野県立歴史館